

## ルカによる福音書8章「弟子たちへの実施訓練」

### 1A キリストに従う者たち 1-21

1B イエスに従う弟子たちと婦人たち 1-3

2B 神のことばの聞き方 4-18

1C 四種類の土 4-8

2C 喩えの意味 9-15

3C 明らかにされる実 16-18

3B 肉の家族よりも大切な家 19-21

### 2A 弟子たちに見せられた権威 22-56

1B 風を静められる力 22-25

2B 悪霊に対する御力 26-39

1C レギオンの破壊力 26-33

2C 解放の力を受け入れられない人々 34-39

3B 病と死を滅ぼす方 40-56

1C 娘のゆえひがまずく会堂司 40-42

2C 治療できぬゆえ衣に触る女 43-48

3C 両親と弟子三人に見せた奇跡 49-56

## 本文

ルカによる福音書 8 章を読んでいます。8 章から、イエス様はご自分の焦点を少し変えられています。それは、ご自身が召し出し、付いてきている弟子たちに、ご自分のことばにある力と権威をお見せになっています。多くの人々に主は働きかけておられました。続けて働きかけて行かれますが、それと同時に、ご自身の弟子たちが本当の意味でご自分が誰なのか、またその言葉に力と権威があることを知らせるために、気を使っておられる姿を見ます。そして次週、9 章はその弟子たちに、ご自身の権威を授けて、彼らは、今度は、神の国を宣べ伝えて、悪霊を制して病気を癒す力を与えられます。

私たちが神の国に生きる者として、イエス様との関係において三つの段階があります。一つは、召しです。呼び出しです。イエス様についてくるように呼ばれ、従い始めるということです。ペテロやヨハネが呼ばれ、マタイが呼ばれたのを私たちは見ました。そして二つ目は、弟子作りです。弟子として生きるには、イエス様からの特別な指導が必要になります。そして三つ目は、遣わされることです。イエス様の力と権威を帯びて、主の働きを自らが行っていくことです。8 章は、その二つ目、弟子作りに焦点を当てるイエス様の姿を見ることができます。

## 1A キリストに従う者たち 1-21

### 1B イエスに従う弟子たちと婦人たち 1-3

1 その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。  
2 また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。

私たちは7章の学びにて、シモンの家に招かれたところを読みました。不道德な女がイエス様の御足を涙で洗って、髪の毛で拭いて、それから油を塗ったことについて、罪が多く赦されたから多く愛しているのだと言われました。そして、「あなたの信仰があなたを救ったのです」と言われました。ご自身とその言葉を信じていたので、それで罪が赦されたのですよ、とされています。そしてその後、町や村を巡りました。神の国を説かれて、福音を語られています。神の国の福音とは、「罪やその他のことに囚われている人々が、その赦しによって解放される、神の自由の世界」と言ったらよいでしょうか。そこには癒しがあり、解放があり、罪の赦しがあり、そして神への賛美と喜びがあります。そして神に従っていくへりくだった心があります。そこに、「十二人もお供をした。」とあります。イエス様が呼び出された十二人です。

そしてルカによる福音書に特徴的なのは、女たちの働きです。7章において、今、話した、罪赦された女がいました。そしてここでは、十二弟子の他に、大勢の女たちも付いて行ったということです。この女たちの何人かが、イエス様が十字架に付けられた時も、墓に葬られる時も共にいて、そしてイエス様の甦りの第一目撃者となっていきます。そして女の中でも、二種類をルカは挙げています。一つは、まともな生活をしてこなかったであろう女たちです。病にかかり、悪霊に取りつかれていたような女たちです。その代表的な人は、マグダラのマリアでした。もう一つは、地位ある男たちの妻や、裕福な者の妻です。ヘロデの執事の妻までがいます。そう言った人々は、また別の意味で心に虚しさを感じていたことでしょう。イエス様にある神の真実を見て従って来ています。そして彼女たちには彼女たちの奉仕がありました。財産を携えてきたのです。マグダラのマリアには、全く何もなかったでしょう、そして裕福な家の女たちは財を捧げました。どちらもいて、キリストの弟子たちですね。自分の体そのものを、持ってくることも立派な奉仕だし、自分に与えられている財を献げるのも、立派な奉仕です。

## 2B 神のことばの聞き方 4-18

### 1C 四種類の土 4-8

4 さて、大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。5 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。6 また、別の種は岩の上に落ちた。生長したが、水分がなかったので枯れてしまった。7 また、別の種は茨の真ん中に落ちた。すると、茨も一緒に

生え出てふさいでしまった。8 また、別の種は良い地に落ち、生長して百倍の実を結んだ。」イエスはこれらのことを話しながら、大声で言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

イエス様は、これまで広範囲にみことばを語られていましたが、その方法を少し変えられました。譬えを使って語られています。大勢の群衆が集まっても、その群衆が聞いて理解できる話をされました。ここでは、種蒔きの譬えです。午前礼拝で詳しく話しましたので、後で聞いてください。大事なものは、大声で、「聞く耳のある者は聞きなさい。」と言われたことです。全ての人が悟ることは期待していませんでした。自ら良い立派な心で聞く人のみが、聞いて悟ることができるようにされたのです。

### 2C 喩えの意味 9-15

9 弟子たちは、このたとえがどういう意味なのか、イエスに尋ねた。10 イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないように』するためです。

弟子たちだけには、神の国の奥義が解き明かされます。奥義とは、私たちが考えるようなものとは違います。これは、「これまでは明らかにされず隠されていたが、今や明らかにされた」という意味を持っているものです。隠しているのではなく、むしろ隠されたものをこれから披露します、というものです。ですから、イエス様がわざわざ群衆から隠しているのではなく、むしろ、それを明らかにしたいと願われて、その注意を引き寄せておられるのです。

エゼキエルに、神は、イスラエルの民が頑なであると言われました。そして、左脇を下にして横たわって、390 日間そうしなさいと言われます。それから右脇を下にして 40 日間そうしなさいと言われます。一体、それは何なんだ？と注意を引いたら、その人たちにその意味する所を語るように命じられました(4:4-12 参照)。それと似たようなことを行われています。ですから、弟子たちはもとより、群衆の中にもイエス様に従っていきたく願う者であれば、だれでもその意味を聞くことはできたのです。しかし現実には、そこまでの関心や飢え渴きがありません。それで、イザヤが預言したように、見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないということです。

11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。12 道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないように、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです。13 岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たちのことです。14 茨の中に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らはみことばを聞いたのですが、時がたつにつれ、生活における思い煩いや、富や、快樂でふさがれて、実が熟すまでになりません。15 しかし、良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみこと

ばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。

神の国というものは、御言葉を立派な良い心で聞いて、しっかりと守り、忍耐して実を結ぶ人々によって広がって行くことがよくわかります。これは、イスラエルの民が荒野の旅をしていた時からずっとそうであったことを思い出します。マナによって生きても、それは神がそう約束されたのであって、だからこそ毎朝、一日食べる分だけ、与えられていました。神の言われることを受け入れ、それをしっかりと保ち、忍耐して待つというところに、彼らが成長できる秘訣がありました。いろいろな律法がありましたが、そこに神の国の本質があるのです。そしてイエス様は、この第四の土のように、弟子たちがなってくれることを願っておられたのです。私たちにも、そう願われています。

### 3C 明らかにされる実 16-18

16 明かりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする人はいません。燭台の上に置いて、入って来た人たちに光が見えるようにします。17 隠れているもので、あらわにされないものはなく、秘められたもので知られないもの、明らかにされないものはありません。18 ですから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っていると思っているものまで取り上げられるからです。」

福音書を比べますと、とても興味深いことに気づきます。イエス様が語られていることで、繰り返されている言い回しはとても多いのですが、注意して比べると、実は他の意味合いで同じ言い回しを使われている場合が多いことです。イエス様の一つの話をも、福音書の著者が繰り返して使っているというよりも、イエス様ご自身が、同じ話をいろいろな場面で語られて、しかも文脈も少しずつ変えながら語られていることがあります。

ここでの、「明かりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする人はいません。燭台の上に置いて、入って来た人たちに光が見えるようにします。」という言葉は、マタイの福音書の山上の説教では、あなたがたは世界の光なのですというところで語られていました。そして、自分の光を隠すのではなく、人々に見せなさいという文脈で語られました。しかし、ここでは、「イエス様の言葉の聞き方は、後に、自ずときちんと来ていたかどうか、明らかにされる。」という文脈で語っておられます。「隠れているもので、あらわにされないものはなく、秘められたもので知られないもの、明らかにされないものはありません。」とされていますね。どのように聞いているかは、イエス様が語られている時点では明らかにされません。しかし、だんだん分かって来ます。信仰をもって聞いていけば、必ず実が結ばれます。しかし、信仰を持って聞いていない、先ほどの道端に落ちた種や、岩の上、茨の真ん中に落ちた種では、実が結ばれないのです。

そして、聞いていない人は、自分が持っていると言われている祝福が取り去られていきます。けれども、聞いている人は、今、持っているものに加えて神が祝福して下さいます。思い出すのは、ア

ブラハムと甥のロトです。アブラハムがエジプトに降り、共にエジプトから出て来ました。そして、ベテルとアイの間で牧畜をしていました。ところが土地が狭すぎて羊飼いたちが争うようになったので、アブラハムのほうから、「あなたが住み着きたいところを選びなさい」と譲りました。するとロトは、死海付近を選んだのです。「創 13:10 ロトが目を上げてヨルダンの低地全体を見渡すと、【主】がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったので、その地はツォアルに至るまで、【主】の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。」彼は、目に見えるほうを選んでいったのでした。しかし、アブラハムは約束の地に踏みとどまりました、神の言葉に留まっていたのです。ロトは、その後、ソドムの近くに住み、それから王たちが襲ってきてさらわれたけれども、アブラハムが追跡して、取り戻しました。けれども、その後に彼はソドムで役人になるほどまでになっていました。彼に残されたのは、わずかに未婚の娘二人だけだったのです。アブラハムは多くの子孫に恵まれています。こうやって聞く耳を持っているかどうかで、その後の人生が決まってしまうのです。

### 3B 肉の家族よりも大切な家 19-21

19 さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、大勢の人のためにそばに近寄れなかった。20 それでイエスに、「母上と兄弟方が、お会いしたいと外に立っておられます」という知らせがあった。21 しかし、イエスはその人たちにこう答えられた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちのことです。」

話は、同じ内容が続いています。イエス様は、神の言葉が良い地に種が落ちるようになっているかどうか、肉の家族との関係においても適用されています。今、マリアが来ており、それから半兄弟ですが、ヨセフとマリアの間に生まれた息子たちが来ています。けれども、イエス様は、神の言葉を聞いて行う人たちのほうをご自分の母、兄弟とされました。弟子たちの間に、新たな神の家族が、御言葉を聞いて従う者たちの間にすでに存在するのだということです。他の箇所でも、イエス様は弟子になるために、こう言われます。「14:26 わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。」思い煩いは、自分の家族との関係も含まれることがここで分かりますね。

### 2A 弟子たちに見せられた権威 22-56

そしてイエス様は、ご自身の言葉の権威をこれまでになく、はっきりと分かる形で示されます。

### 1B 風を静められる力 22-25

22 ある日のことであった。イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたので、弟子たちは舟を出した。23 舟で渡っている間に、イエスは眠り始められた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、彼らは水をかぶって危険になった。24 そこで弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、私たちは死んでしまいます」と言った。イエスは起き上がり、風と荒波を叱りつけられた。すると静まり、凪になった。25 イエスは彼らに対して、「あなたがたの信



仰はどこにあるのですか」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「お命じになると、風や水までが従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」

イエス様の権威は、このように自然界に対してもあったことが、弟子たちの目の前で示されました。弟子たちが、驚き恐れていますね。この方はいったい誰なのだろうか？と。驚いているだけでなく、恐れも抱えています。かつて、ペテロが網をイエス様の言われる通りに降ろしたら大漁になって、それで恐れて、「私は罪深い者です。私から離れてください、主よ。」と言いました。それと同じです。あまりにも大きな力をイエス様が持つておられるので、自分たちはこれまで気楽に、イエス様に付き合ってきたけれども、この方はいったいどなたなのか？と恐れたのです。この方は天地万物の神の御子であり、この方ご自身が創造主であります。ですから、光よ、あれと言われたら光があるという力を持つておられます。自然界に対する権威です。

そして、イエス様は実地訓練をされています。イエス様が教えたかったことは、「あなたがたの信仰はどこにあるのです。」であります。イエス様は、初めに「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われました。これがイエス様の言葉でした。そして向こう岸に渡るというイエス様の何気ない言葉を弟子たちは聞いていたはずですが、しかし、これは神の言葉だったのです。ですから向こう岸に行けるのです。嵐が来ようと思えます。ですから、しっかりと聞いて、その真意を受けとめていたなら、彼らは死ぬかもしれないと思う必要はなかったのです。

そして、イエス様がぐっすり寝ておられました。これこそが、神の国の奥義を表しており、嵐のような状況であっても父なる神への信頼の中でぐっすりできるのです。神の言葉を信じ、そして神の支配を信じて休むことができるということです。ダビデもこんな信仰の立場を取りました。「詩 3:5-6 私は身を横たえて眠りまた目を覚ます。【主】が私を支えてくださるから。私は幾万の民をも恐れない。彼らが私を取り囲もうとも。」しかし、弟子たちは嵐によって自分たちで何とかしなければいけないと誤ってしまいました。神への信頼がどこかに行ってしまいました。さらに、イエス様をなじることまでしました。私たちもしませんか、嵐のような試練において、神がなぜこのようなことを許されたのか、なぜこのように自分を大変な思いをすることを許されたのかなじるでしょう。

## 2B 悪霊に対する御力 26-39

次に、大いなる力が霊的勢力に対して行使されました。

## 1C レギオンの破壊力 26-33

26 こうして彼らは、舟で、ガリラヤの反対側にあるゲラサ人の地に着いた。

「ガリラヤの向こう側」という言葉は、単にガリラヤ湖の向こう岸という意味ではありません。むしろガリラヤ地方に相対する地域に入りました、という意味合いが強いです。「ゲラサ人」とあります

が、ある写本では「ゲルゲサ人」となっています。またマタイやマルコは「ガダラ人」としています。この点を整理してみたいと思います。彼らが到着したところの町は、ゲルゲサというところですが、ガダラはガリラヤ湖の南東にある町で、今はヨルダン領にあり、そこからガリラヤ湖を一望できます。そして、ゲラサはガダラからずっと南にある町で、今は「ジェラシュ(Jerash)」として知られています。今のヨルダンの中部にあります。そして、ガダラとゲラサはデカポリスという十の自由都市に入っています。ガリラヤ湖の南東の広域に広がっている、ギリシヤ時代からの独立を保ってきた都市が連携して残っている所です。ゲルゲサはそのデカポリスの中にある町で、異邦人が多数いる領域であったのです。それで、実際のガダラにもゲラサにもないのですが、その人たちが住んでいる方面に行ったという意味合いです。成田空港が東京にないのに、東京国際空港と呼ばれているような感じです。

ですから、イエス様はここで、ユダヤ人の多くいるところから、異邦人の多くいる地域へ動いていたということです。前回の学び、7章でも、イエス様の言葉によって百人隊長のしもべが癒されましたね。イエス様は、イスラエル人の失われた羊のところに来られましたが、それでも異邦人に対しての働きかけは、すでに行われていました。そしてそれが大体的に行われるのは、ご自身が天に昇られ、聖霊が降られてから、使徒ペテロなどを通して啓示され、それで異邦人伝道が広がって行きます。

27 イエスが陸に上がられると、その町の者で、悪霊につかれている男がイエスを迎えた。彼は長い間、服を身に着けず、家に住まないで墓場に住んでいた。28 彼はイエスを見ると叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。お願いします。私を苦しめないでください。」29 それは、イエスが汚れた霊に、この人から出て行くように命じられたからであった。汚れた霊はこの人を何回も捕らえていた。それで彼は鎖と足かせでつながれて監視されていたが、それらを断ち切っては、悪霊によって荒野に駆り立てられていた。30 イエスが「おまえの名は何か」とお尋ねになると、彼は「レギオンです」と答えた。悪霊が大勢彼に入っていたからである。

悪霊につかれている男がイエスのところにやって来ました。イエス様は既に、悪霊に対してこの男から出ていけと命じられていたからです。それで、それに激しく抵抗している悪霊がこの男をイエスのところまで連れてきた、ということです。そして、彼の状態はとても悲惨でした。おそらく初めは、普通に人々の間に住んでいたことでしょう。けれども、どんどん奇怪なことをし始め、人々から離れて住み始め、そしてついに着物を脱ぎ捨て、墓場に住んでいました。その人の神のかたちとしての尊厳がことごとく奪われていました。イエス様は、そういったこと一人の魂に心を留めておられます。そしてユダヤ人にとっては、この光景は実に陰惨なものです。死体に触れてはならない、汚れると神は律法で教えておられました。まさに、その中に住んでいました。全く、自分たちとはかけ離れたおぞましい世界です。しかし、イエス様はその偉大な力を悪霊の勢力に示されます。

そして、イエス様が宣教の働きを始められたばかりの時に、会堂の中で悪霊が叫び出したことを思い出してください。その時に、「4:34 ああ、ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちが滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」と叫んだことを思い出してください。今、ここでもイエス様を見て、悪霊の集団レギオンは、「いと高き神の子イエスよ」と叫んでいます。興味深いことに、悪霊どもは、「私とあなたに何の関係があるのですか」と叫んでいますね。この声、私たちはしばしば聞きませんか？「イエスのことなんか、私と何の関係があるのですか？」と言って、関わらないでほしいと言って、強く反発する人々がいますね。そういった声には、悪霊の支配と影響があるのです。しかし、神は愛しているがゆえに、おせっかいをしておられるのです。中に入ろうとしておられるのです。

イエス様は、この男に名前は何かと問われています。「レギオン」と答えました。レギオンは、ローマの軍の単位で六千人という意味です。イエス様に対して、六千もの悪霊どもの集団が対峙していたということです！マグダラのマリアには七つの悪霊が宿っていたと先にありましたが、何千もの悪霊が宿っているのですから、全く桁外れの霊の戦いであることがわかります。当時のユダヤ教の悪霊祓いでは、相手の名前を問い質すというものがありませんでした。それは、正体をはぐらかすことなく、自分はいったい何なのか述べてみなさいと命じているのです。悪霊どもはいつもははぐらかしますが、イエス様は名を明かすことに成功しました。

31 悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないようにと懇願した。32 ちょうど、そのあたりの山に、たくさんの豚の群れが飼われていたので、悪霊どもは、その豚に入ることを許してくださいと懇願した。イエスはそれを許された。33 悪霊どもはその人から出て、豚に入った。すると豚の群れは崖を下って湖へなだれ込み、おぼれて死んだ。

悪霊にとって最も苦痛なことは、体を持っていないということのようです。だから、彼らから自分たちを追い出すなとイエス様に願っていました。そして、もう一つ耐え難いと思っていることがあり、それが、「底知れぬ所」に行くことです。「底知れぬ所」はアブソというギリシア語で、悪霊どもや不従順な霊どもが閉じ込められているところでもあります。ユダの手紙には、こう書いてあります。「1:6 またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。」これが、地上で徘徊している悪霊どもの行くところでした。黙示録 9 章には、一時的に、悪霊どもが底知れぬ所から解き放たれて、地上にいる者たちを、さそりの毒のように刺して、五カ月の間、苦しめることが書いてあります。そして 20 章には、主が地上に再臨されるにあたって、悪魔を神が底知れぬ所に千年の間、閉じ込めることが書かれています。

そこに行きたくはなかったので、「その豚に入ることを許してくださいと懇願した」とあります。これで、体がないままにいるという苦痛からも免れることができます。この光景もユダヤ人にはおぞま



しいものです。豚は汚れた動物とレビ 11 章でみなされており、そういったところに入ることを望む悪霊は、本当に汚れているという気持ちをユダヤ人は抱いたことでしょう。イエス様はそれをお許しになります。ここで完全にイエス様がレギオンに対して主導権を握っていることが分かります。もはや、数千の悪霊の勢力はイエス様の権威の下にひれ伏すしかなかったのです。

そして、ガリラヤ湖の中になだれ込み、死にました。海の底、水の深いところは、聖書には、罪や死があるところ、死者が行くところ、また悪霊どもが住むようなところがあることが示唆されています。底知れぬ所も水の深いところにあることが示唆されています。創世記の始まりに、「1:2 闇が大水の面の面にあり」とあります。けれども、黙示録で最後の審判にて、海から死とハデスが出てきたとあり、そこにいた者たちが甦って神から裁きを受けた後は、ゲヘナに投げ込まれることが書かれています。そして 21 章の始まりに、「また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。」とあるんですね。預言者ミカは、罪を告白して、赦してほしいことを願った時に、「7:19 もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深み投げ込んでください。」とお願いしています。レギオンは結局、底知れぬ所には行かなかったものの、そこに限りなく近いところに投げ出されたということです。そしてイエス様は、二度と、この地域にこれらレギオンが徘徊することがないようにされたのです。

#### 2C 解放の力を受け入れられない人々 34-39

34 飼っていた人たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や里でこのことを伝えた。35 人々は、起こったことを見ようと出て来た。そしてイエスのところに来て、イエスの足もとに、悪霊の去った男が服を着て、正気に返って座っているのを見た。それで恐ろしくなった。36 見ていた人たちは、悪霊につかわれていた人がどのように救われたか、人々に知らせた。37 ゲラサ周辺の人々はみな、イエスに、自分たちのところから出て行ってほしいと願った。非常な恐れに取りつかれていたのであった。それで、イエスが舟に乗って帰ろうとされると、38 悪霊が去ったその人は、お供をしたいとときりに願った。しかし、イエスはこう言って彼を帰された。39 「あなたの家に帰って、神があなたにしてくださったことをすべて、話して聞かせなさい。」それで彼は立ち去って、イエスが自分にしてくださったことをすべて、町中に言い広めた。

イエス様はまさに、神の国の福音、囚われていた人を解放するという働きを行われたのでした。しかし、それを逆に恐ろしいと感じたのが、その地元の人々でした。これまでイエス様に対して、驚いた人々がいました、そして恐れた人々がいました。それは、自分たちの快適にしている環境が壊れてしまう時にそうなってしまいます。しかし、それを恐れではなく、確かに新しいことを行われる神がおられるのだとして、信じる人々もいるのです。そして神の国は、そういった信じる人々によって目に見える形で明らかにされていくのです。

自分たちの豚がいなくなってしまったこともそうですし、何よりもこの男が正気に戻っていることが

恐ろしく感じました。一人の人が解放されたのだからすばらしいことだと思うかもしれませんが、考えてください、今まで苦しんでいた人がイエス様に出会って解放されて、明るくなったとしても、それでもえ前の、苦しんで暗くなっていた時の方が良かったのにとする人々が周りにいますね。「ヨハ 3:20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」とあるとおりです。

この男はイエスの弟子になりたいと願いましたが、イエス様が断られます。主は良くお考えになっていました、彼はおそらくは異邦人でしょう。彼がユダヤ人たちの間で動けるとは思えません。まだその時期ではありません。そして、何よりも、彼だからこそできる働きがあります。「あなたの家に帰って、神があなたにしてくださったことをすべて、話して聞かせなさい。」とイエス様は言われます。まず、家の人々に対する証しです。そして町の人々に対する証しです。ユダヤ人であるイエス様にはできないことを、彼はその地方の人間だからこそ行なうことができます。そして、種蒔きというか、下地造りをすることができるのです。

デカポリス地方をもう一度、イエス様の一行は通られることとなります。それが四千人の給食ですが、それはガリラヤ湖の東側で行われたと思われます。イエス様は、急進的にご自分の働きを広げるのではなく、人々の心に依じて、その人々が心を開くのに依じて働きかけてくださいます。聞く耳のある人々が起こされたら、神の国を明らかにしていかれたのです。この男と同じように、もしかしたら自分自身が近くにいる人々に福音を伝える召しを受けているかもしれません。

### 3B 病と死を滅ぼす方 40-56

こうやって海と嵐に対して、自然に対してイエス様はご自分の言葉の力を見せられました。そして次に、霊の世界に対して大いなる力を現しました。そして次に、これまでにない方法で、死者をよみがえらせるという、死に対する力を現されます。

### 1C 娘のゆえひがまずく会堂司 40-42

40 さて、イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。みなイエスを待ちわびていたのである。41 すると見よ、ヤイロという人がやって来た。この人は会堂司であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して、自分の家に来ていただきたいと懇願した。42 彼には十二歳ぐらいの一人娘がいて、死にかけていたのであった。それでイエスが出かけられると、群衆はイエスに押し迫って来た。

異邦人の地域とは打って変わって、ユダヤ人のいるところに戻って来られると、歓迎ムードでした。しかし、その中にユダヤ教指導者がいました。ヤイロです。会堂司という新改訳 2017 の訳はとても良いと思います、以前は、「会堂管理者」と訳されていました。これだと単なる建物の管理者のように聞こえます。しかしユダヤ教の霊的な指導者であります。彼らはイエスに対して強い反発を抱いていました。けれどもヤイロは違いました。彼をイエスの足もとにひれ伏させたのは、自分

の娘の死に至る病です。神は時に、このようなことがなければ決してイエスのところに来ない人々に、ヤイロのように押しやるようなことを行われます。

ここで大事なのは、娘が十二歳であるということです。イエス様が十二歳の時に親に連れられてエルサレムに行かれましたが、同じように彼女もこれから大人になろうとしています。その時に突如として襲って来た悲しみでした。しかし次に出てくるのは、十二年間長血をわずらっている女です。ヤイロの家に新しい命が与えられ、喜びをもたらしていたその時に、一人の女には不幸が始まっていたのです。人生というのは、このようなものです。私たちは、ある人は幸せで、またある人は不幸せだという区別をしますが、神は差別をされない方です。神はヤイロの家族をも、長血をわずらう女をも、イエスによって救われることを願っておられます。

そして、群衆が押し寄せています。このギリシア語は、「窒息しそうなぐらいの押し寄せ」だそうです。同じ言葉が、いばらのある土に種が落ちたとえに使われているそうです。「押しふさいでしまった」という言葉です。まるで、人々からの必ずしも信仰によるものではない大きな期待や人気によって、人の命が一人失われるかのようです。

#### 2C 治療できぬゆえ衣に触る女 43-48

そのような押し迫る群衆の中で、唯一、ご自分に触れたとイエス様が言われた人がいました。

43 そこに、十二年の間、長血をわずらい、医者たちに財産すべてを費やしたのに、だれにも治してもらえなかった女の人があった。44 彼女はイエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。すると、ただちに出血が止まった。

長血を患う女です。ヤイロだけでなく、彼女も同じように、そのどうしようもない状況からイエス様のところに近づきました。長血を患うことはその病の重さだけを話しているのではありません。レビ記 15 章に書かれていますが、女が血を流すことについて、その期間は不浄であるとみなされま。彼女の触るものはみな汚れてしまいます。ですから、彼女は人々から離れていなければいけません。月のさわりの時にはですから汚れるのですが、彼女のように不正出血をしているのであれば、その間ずっと離れていなければいけなかったのです。彼女は社会からずっと外されていたのです。さらに彼女は、医者に自分の生活費を全部使い果たしてしまいました。今、受けている病についてそれを直してもらおうと医者から医者へ渡り歩くのですが、かえってお金だけ取られて一向に直らない…。今の高度に発達した医療技術であっても、このような経験はありますね。しかし、このこともヤイロと同じように、神が、彼女が救われるために用意された道だったのでしょう。

彼女は掟破りのことをしました。彼女は、触ってはいけないのです。大変混雑している中、彼女は多くの人々を汚れさせていました。けれども、彼女は構わなかったのです。イエスの着ているも

のの房にさえ触れば、癒されると思ったのです。福音書に出てくる多くの者たちが、人目など気にせず、そのまま真っすぐイエスのところにくる人が救われるのを書き記しています。そのまま、イエスのところに来るといふ信仰です。そして、この房は、ユダヤ人の男が来ていた、着物の裾に付いているものです。祭司の装束の規定の中に、それが出てきます。女は、それにさえ触れば癒されると思いました。それは下についているので、下から這いつくばるようにイエス様に近づいて行ったのでしよう。

45 イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか」と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、「先生。大勢の人たちが、あなたを囲んで押し合っています」と言った。46 しかし、イエスは言われた。「だれかがわたしにさわりました。わたし自身、自分から力が出て行くのを感じました。」47 彼女は隠しきれないと知って、震えながら進み出て御前にひれ伏し、イエスにさわった理由と、ただちに癒やされた次第を、すべての民の前で話した。48 イエスは彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

「触る」の意味が違います。この女は、信仰をもって触りました。他の群衆は、物理的にはイエスに触っていますが、信仰によって触っていません。同じことをしていても、信仰によるのと、そうでないのでは全く違います。

女は、すべて隠れて行なおうとしていました。群衆に触って入っていったのですから、これは掟破りです。そして、イエス様との関わりも、ただ着物の房だけを触ろうとする関係でした。しかし今、イエス様に呼ばれて、隠しきれなくなったのです。それで彼女は震えていました。震えながら、全てのことを話しました。イエス様は、それぞれの霊的必要を知っておられます。この女には、自分のしたことを隠さない、信仰を公にする必要がありました。この恐れはゲラサ人の抱いた恐れとは違います。彼女は圧倒的な恵みの中で、自分の闇が明らかにされました。神の恵みを知ることは、自分のありのままの姿を明らかにすることでもあります。これは勇気が要ります。しかし、喜びの中にある恐れです。神への畏敬であります。

そしてイエス様の言葉が、彼女を安心させます。まずイエス様は、「娘よ」と呼ばれています。イエスは、先ほどの悪霊につかれていた男と同じように、社会的には卑しめられている人々に心を留めておられます。解放を与えます、これが良い知らせ、福音です。それから、大事なものは「あなたの信仰があなたを救ったのです。」という言葉です。

### 3C 両親と弟子三人に見せた奇跡 49-56

49 イエスがまだ話しておられるとき、会堂司の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすことはありません。」50 これを聞いて、イエスは答えられた。「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われます。」

今、ヤイロの娘が死んでしまいました。しかし、ここに信仰が要ります。ヤイロのように、一向に助けが来ないで状況が悪化するように見える時があります。しかし、神は遅れておられません。

51 イエスは家に着いたが、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、そしてその子の父と母のほかは、だれも一緒に入ることをお許しにならなかった。52 人々はみな、少女のために泣き悲しんでいた。しかし、イエスは言われた。「泣かなくてよい。死んだのではなく、眠っているのです。」53 人々は、少女が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。54 しかし、イエスは少女の手を取って叫ばれた。「子よ、起きなさい。」55 すると少女の霊が戻って、少女はただちに起き上がった。それでイエスは、その子に食べ物を与えるように命じられた。56 両親が驚いていると、イエスは、この出来事をだれにも話さないように命じられた。

ゲラサ人たちが住んでいたところと同じように、ここでも不信仰が満ちていました。イエス様が眠っているのだと言われた時に、人々はあざ笑っています。それでイエス様は、見る力、聞く力のある者たちにだけ、ご自分の言葉の力を示されたのです。ここでも、まだ言葉の力なのです。「子よ、起きなさい。」と言われます。これを受け入れることのできたのは、少女の家族、ヤイロやその妻のみでした。

そして、イエス様は三人の弟子を選ばれています。ペテロ、ヨハネ、そしてヤコブです。こうやって、主は弟子たちにご自身の権威がどのようなものかを示しておられるのです。ペテロは、使徒の働きで、ヤッファのドルカスを、同じように声をかけることによって生き返らせています。きちんと主から、学んだのですね。興味深いことに、もう二人の使徒、ヤコブとヨハネは、最も早く殉教した使徒がヤコブであり、最後に死んだのがヨハネだということです。

こうやって主は、ご自身が教えられたことを弟子たちに少しずつ、お見せになることによって彼らの実地訓練を施されたのでした。譬えで聞いた話は原則でしかありません。しかし、実際のことになれば話は別です。頭で理解していても、実際の場面に入ったら果たして、自分が正しく聞いていたのかが試されます。そこで、全ての人に共通するのが「信仰」です。主は働かれようとされています。自然に対しても、霊の世界に対しても、そして病や死そのものに対しても働かれようとされています。私たちに必要なのは、信じることなのです。その信じるということ、とても単純なのですが、どうしても私たちの中に岩地のような固さがあったり、茨のような思い煩いもあります。良い立派な心で聞き、しっかりと守り、そして忍耐をもって実を結ばせていくという生活の中に入って行きましょう。